特集：新型CX-5

2

新型CX-5 のデザイン
Design of All-New Mazda CX-5

諫山　慎一*1
Shinichi Isayama

要　約

マツダデザインでは魂動という哲学の下，クルマを単なる鉄の箱ではなく，命あるものだという思想と情熱をもってデザインを行っている。新型CX-5では，デザインで具現化する価値を更に一段引き上げるため，新たに「Car As Art」というテーマを設定した。それはまるでアート作品を見た時に心奪われ，ときめく，そんな価値をクルマのデザインで実現したい，という取り組みである。その手段として，人の手で吟味され生み出される「ぬくもり」を感じられる表現や，日本固有の美の表現「引き算の美」に着目，要素を減らし研ぎ澄ます中に造形の美しさが際立つ表現に取り組んだ。新型CX-5としてのデザインコンセプトは「Refined Toughness = 洗練された力強さ」とし，エクステリアでは，プロポーションの見直しやリフレクションのコントロールにより，クルマとしての美しさ，走りの良さを感じさせるスタイリングを作り上げ，インテリアでは，骨格，素材，形状の最適化により，所有する歓びを感じられる上質な空間を構築した。また新色ソウルレッドクリスタルメタリックを開発し、鮮やかさと深みを両立させ造形のニュアンスを繊細に表現することが可能となった。これらの取り組みの結果，全方位で一段上質な世界を感じていただけるデザインを実現した。

Summary

Under the philosophy of KODO - Soul of Motion design, Mazda designers, who regard the car as something that has life, not simply a mass of metal, are passionately engaged in car design. To elevate the KODO design language to a new level, we set a new design theme “Car As Art”. This represents our commitment to embodying a value similar to that you would find when you are fascinated and fall in love with a work of art, in the form of car design. To realize such a car design, we focused on the “warmth” of a human hand in elaborate details and Japan’s unique artistic expression “Subtractive aesthetics”, and challenged ourselves to create an expression in which the beauty of formative design stands out in a minimum quantity of finely-honed elements. We defined the design concept for the All-New Mazda CX-5 as “Refined Toughness”. For the exterior design, we produced the beauty as a car and such a styling that suggests outstanding driving performance backed by a refined proportion and more precisely-controlled light reflection. Likewise, we realized a quality interior space that conveys the pleasure of ownership by optimizing its framework, materials and shapes. A new color available for the first time on the All-New CX-5, Soul Red Crystal Metallic, was created specifically to balance vividness with depth and express a subtle nuance of its formative design. As a result of the efforts described above, we successfully developed a design that, in every direction, provides a premium and quality experience for our customers.

1. はじめに

初代CX-5はマツダにとって新世代商品の先頭バッターであり，デザイン的にも魂動の哲学を具現化した最初の商品であった。その健康的なパッケージや若々しく躍動感あふれるスタイリングは世界中で多くのカスタマーに受け入れられ，一代でマツダの基軸車種へと成長した。新世代商品群が一巡した今，この新型CX-5は次世代商品群へつな

*1　デザイン本部
Design Div.

ぐ架け橋という重要な位置づけの商品である。

新型CX-5では，初代CX-5を選んでいただいたお客様にもう一度選んでいただくことを目標の一つに掲げている。そのために，ドライバーだけでなく，同乗者を含む全てのお客様に「走る歓びの深化」を感じていただくことを目標として開発した。デザイン領域ではこれを「美しいもの，上質なものを所有することで日々の暮らしをより豊かに感じられる歓び」ととらえ，その実現へ向けて開発した。カスタマーの人生とともに歩み，より大人の成熟した価値観にふさわしいデザインへと深化させること，それは同時にCXシリーズが3，4，9とレンジを広げる中で，CX-5として最適な立ち位置の見直しにもつながった。

2. デザインコンセプト

新型CX-5のデザイン開発は，マツダにとって次世代の究極のビジョンモデルの一つであるRX-VISION（2015年の東京モーターショーで初公開）と同時期に進められた。「Car As Art」実現のために，人の手で作られた「ぬくもり」や日本の美，特に「引き算の美」へ着目していく中で，新型CX-5としても，新しいデザインを生み出すために「単に目新しい何か」を加えていく手法ではなく，初代CX-5の持つ魅力，その良さを更に磨き上げ，研ぎ澄ます中でより上質なデザインへと深化熟成を図る方向であるとねらいを定めた（Fig. 1）。

Fig. 1　RX-VISION

この考えをベースとして，新型CX-5のデザインコンセプトは「Refined Toughness = 洗練された力強さ」と設定した。世界的に見られるSUVの一般化という潮流の中で，大人の風格を感じさせる上質な世界観と，SUVらしい力強さの融合による「美しい力強さ」の表現を狙ったものである。「Refined」という言葉の「洗練された」という意味に，磨き上げ，研ぎ澄ました先に現れるマツダがイメージする「美しさ」を重ね合わせている。

3. エクステリア

上品な艶やかさと大人の風格を感じさせる，精悍なエクステリアデザイン

初代CX-5で好評を得たバランスの良いパッケージングを継承しつつ，躍動感に満ちた若々しいキャラクターを成長させ，精悍かつ堂々とした佇まいを備えた大人の風格を創出することに注力した。クルマとして美しいキャビンとボディーのバランスとスタンスの良さを強調する「プロポーション」，シンプルな造形の中にエモーショナルで美しい映り込みを手仕事でつくり込んだ「フォルム」，随所に採り入れた精緻で端正な「ディテールデザイン」により，艶めきのある精悍なエクステリアを実現した。

3.1　プロポーション・・・美しいバランス

クルマとしての走りの良さを感じていただける骨格表現を狙った。視覚的な重心位置を下げ，ボディー全体がしっかりと地面を掴んだプロポーションを表現している。前後トレッドは10mm拡大し，タイヤを限界まで外側に配置してスタンスを強化した。また，フロントタイヤ，リアタイヤがしっかりとボディーを支えて見えるようキャビンとボディーのバランス見直しを行った。キャビン前方のAピラー付け根位置を先代モデルから約35mm後退させ，フロントアクスルとAピラーの位置を適正化，ボンネット部分はグリル上端を車両先端付近まで延長，カウル部分は逆にウィンドウ側へ延長することでオーバーハングを伸ばすことなくトータルで約100mm長く見せている。また，ベルトラインは前側の高さを上げ，後ろ側を下げることでやや水平方向へアジャストし，キャビンを薄く，ボディーを厚く見せている。これらによりスポーティーで走りの良さを感じさせる，美しいプロポーションを実現した。またこれにより，交差点での前方左右見開き角や斜め後方振り向き視界の視認性向上も図った（Fig. 2）。

Fig. 2　Proportion

3.2　フロントフェイス・・・ブランド表現の進化

フロントの表情を左右する，ファミリーフェイスの考え方を進化させた。水平基調の要素を強め，上質で落ち着き

のある表現とすると同時に，彫りの深さを強め，大人の精悍な顔つきを表現した。薄型化し低く構えたヘッドランプ，先端をヘッドランプの下側に通して左右への広がりを強調したシグネチャーウイング，極細のLEDフォグランプベゼルなどで水平基調の造形を際立たせ，低くワイドな表現を強化した（Fig. 3）。

Fig. 3　Front Face

フロントグリルではシグネチャーウイングとブランドシンボルが引き立つ造形を意識した。3次元的な立体感を強めたシグネチャーウイングの造形はあたかも一つのアートピースのように感じていただける独立した形状とした。メッシュ部分は，立体的な造形の精緻なパターンを採用。遠くから見た際には黒い背景として目立たず，近づいてみるとキラキラと輝く手の込んだ立体が目に入ってくる，そのバランスを意識して造り込んだ形状である。メッシュ基本面は通常と逆のネガ形状とし，シグネチャーウイングとブランドシンボルの立体感を更に際立たせ，非常に彫の深い，大人っぽい精悍な表情を引き立てている（Fig. 4）。

Fig. 4　Front Grill

3.3　フォルム・・・味わい深い映り込みの美しさ

シンプルな造形でありながら，味わい深く，エモーショナルなニュアンスが感じられる造形を目指した。初代CX-5の特徴であったキャラクターラインによる上下方向の抑揚的な表現を抑えながら，前後方向のスピード感をダイナミックに表現する面の造形に挑戦した。

フロントフェンダーからリアタイヤへ向けてボディーを前後方向に貫く大きな動きを軸として，繊細にコントロールされたネガ面とポジ面の変化によって映り込む光の表情を変化させている。ボディーサイドのキャラクターラインが徐々に面へと変化する際のハイライトや映り込みの変化，そのピークの位置などを徹底的に調整し，エモーショナルなフォルムであると同時にエレガンスも感じていただける柔らかなニュアンスを造り込んだ（Fig. 5，6，7）。

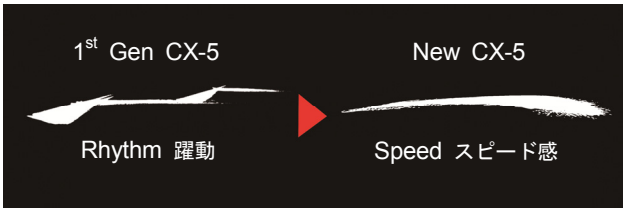

Fig. 5　Comparison of New and Old Themes

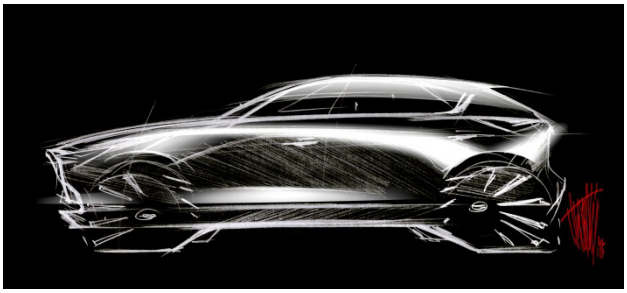

Fig. 6　Theme Sketch of “Speed”

Fig. 7　Bodyside Reflection

3.4　ディテール・・・精緻で端正な造り込み

(1) ランプデザイン

ヘッドランプデザインは全車にLEDタイプを採用することで初代CX-5比約80mm薄型化，Rrランプも約50mm薄型化した。彫の深いランプ周りの造形を引き立てるためにランプ内機についてもグラフィカルな表現ではなく，立体感を強調する造形を行った。また，CX-5としての存在感を昼夜問わず表現するために，発光エリアが均一に光るように精緻な造り込みを行い，昼と夜の見え方にも統一感

を持たせた（Fig. 8）。

Fig. 8　Front & Rear Lamps

(2) ホイールデザイン

SUV の力強さを感じさせる大径サイズのタイヤに，19 インチと 17 インチ 2 種類のアルミホイールを設定した。スポークを細く見せ，中心から外に向かって広がりを感じられるデザインを採用した。

19 インチホイールには，強い立体感を表現するためにセンター部の彫りの深さとスポークの断面変化のコントロールに注力した。これに加え，スポーク断面の先端部を切削加工とすることで，ソリッドで機械的なイメージを表現し，ボディーの有機的な造形表現とのコントラストを持たせ，足元を引き締めて見せている。

17 インチホイールでもスポークを細く見せているが，本数を増やすことで密度を感じさせ，弱く見えないような工夫を行っている。また，ホイール色を暗めに落とすことで，ホイール単体のサイズではなく，タイヤ全体のボリュームでボディーを支えるイメージを表現した（Fig. 9）。

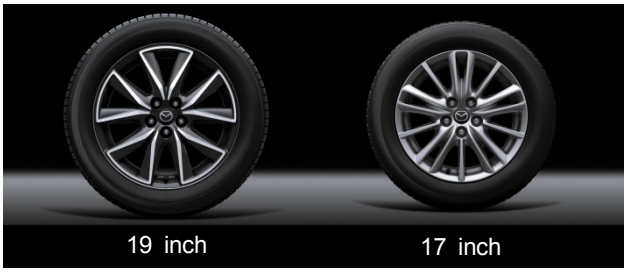

Fig. 9　Alloy Wheels

4. インテリア

人間中心に構築した空間と，高い質感を極めたインテリアデザイン

インテリアでは「空間」「質感」「フォルム」の領域を大幅に見直した。人間中心の思想の元，乗員を取り巻く構造物と素材のあり方にまで立ち戻ってデザインすることで，全ての乗員が心地よい緊張感と安心感，上質な仕立ての良さを感じられるデザインをつくり上げた。

4.1　空間・・・心地よい緊張感と安心感

ドライバーを中心に操作機器や計器類を左右対称に配置した，マツダ車に共通するドライバーとの一体感を高めるコックピットデザインを採用。その上で，ステアリングホイールのセンターからインストルメントパネル加飾，左右の空調ルーバーへと連なる要素の配置を同じ高さに揃え，ドアトリム加飾までつながる水平基調の造形とすることで，横方向へのワイドな広がりのある空間をつくり上げた。

パッセンジャー視点ではインストルメントパネルの重心位置を下げ視覚的な圧迫感を解消，広々と快適な空間に感じられるように内機のレイアウトを調整し断面のボリュームを吟味した。また，サイドデミスターやツイータースピーカーをAピラーに配置変更したほか，高さ約10mmという薄いスリットにCD/DVDプレイヤーを搭載するなど，徹底的にビジュアルノイズを排し，ドライバーが運転に集中できる，心地よい緊張感が感じられるデザインとした。

フロアコンソールは先代モデルより高くワイドなプロポーションとして，左右のアームレストと合わせ乗員の下半身をしっかりとサポート，コマンドポジションでも安心感ある上級SUVにふさわしい骨格を表現した。シフトノブの高さは人間工学的に操作が最もしやすい位置にレイアウトした。

後席においてもレイアウトの見直しを行った。座面高さを初代CX-5比で14mm低くし，シートバック角度を2°倒した。これに加えてリクライニング機構も追加し，快適性を大幅に向上した（Fig. 10，11）。

Fig. 10　Horizontal Theme of Instrument Panel

Fig. 11　Center Console

4.2　質感・・・仕立ての良さ

インストルメントパネルやドアトリムなど，人の手が直接触れる箇所には可能な限り滑らかな手触りの素材を採用するとともに，パッドにも厚みを持たせて触感を高めた。

インストルメントパネルからリアのドアトリムに至るまで，アッパー部にはリアルなダブルステッチを採用。また素材の工法，色，シボ，艶を統一した。ステッチではあえて太めの糸と粗目のピッチを選択し，上質さとともにSUVにふさわしい強さを表現した。加飾パネル下のミドルパネルやニーパッドにもソフト素材を採用したほか，天井材やAピラーの素材，荷室側壁への不織布採用，グローブボックス内への植毛など，素材見直しによって仕立ての良さを追求し全体の質感を大きく向上した。

更に，インテリア全体でパーティングの隙や段差の減少など基本的なクラフトマンシップのレベル向上にもこだわることで，細かな要素に至るまでデザインの意図をクリアに表現した（Fig. 12）。

Fig. 12　Door Trim

4.3　フォルム・・・剛性感と上質さ

シートや加飾部の造形では，SUVらしい力強さと上質さを融合させたフォルムを追求した。シートデザインではしっかりと厚みのある座面，立体感のあるサイドのボルスターやショルダーの造形と質感高い縫製によって，力強さと安定感，そして上質な仕立ての良さを表現した。レザーシートでは，シート全体に帯状の縁取りを持たせ，そこにステッチ色を差し入れることでモダンさを演出。ファブリックシートには緻密で滑らかな触感と立体感をもった新開発の布地を採用し，精悍さを際立たせた。

立体的な造形が特徴的な空調ルーバーはエンジンルームからつながるダクトをイメージしている。柔らかいインストルメントパネルを貫通する造形とし，SUVらしい力強いアクセントとした。

デコレーションパネルには，天然のウッドのような温かみと金属の持つ力強さを融合させた新開発の加飾フィルムを採用。7層もの印刷とコーティングを重ねることで，深みのある表情を備えた新しい表現とした（Fig. 13，14，15）。

Fig. 13　Front Seat

Fig. 14　AC Duct

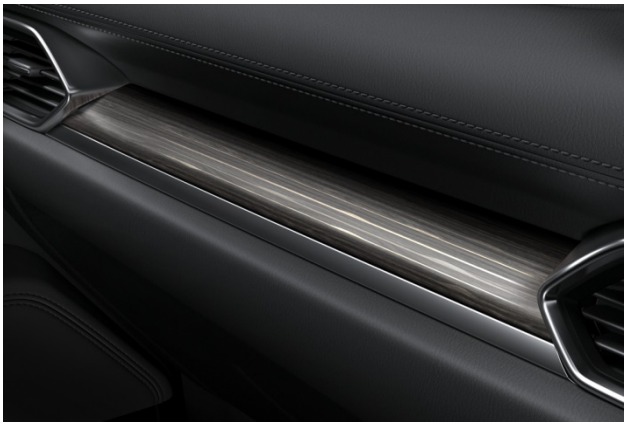

Fig. 15　Decoration Panel

5. カラーデザイン

5.1　ソウルレッドクリスタル

「カラーも造形の一部」という思想のもと，魂動デザインの造形美をより質感高く際立たせるために，ソウルレッドプレミアムメタリックでつくり上げた生命力にあふれたエネルギッシュな強さと鮮やかさ，濁りのない深みと艶感，緻密で硬質な質感を更に進化させ，高次元で両立させた。ソウルレッドプレミアムメタリックと比較して，彩度を約2割，深みを約5割増したことで，より瑞々しく艶やかな

透明感を実現している。

5.2　インテリアカラーラインナップ

ピュアホワイトまたはブラックのレザー内装，ブラックのファブリック内装の3種類を設定。そのうえで，クルマとの一体感と空間の広がりを際立たせるため，インストルメントパネルを境にアッパー部とロワー部で色を使い分けている。

ピュアホワイト内装はアッパー部をブラック，ロワー部をホワイト基調とし，白と黒の鮮やかなコントラストで品のある華やかなインテリアを表現。アッパー部のステッチカラーをダークグレー，ロワー部とシートのステッチカラーにはベージュを採用した。ブラックレザー内装ではアッパー部のステッチカラーをダークグレー，ロワー部とシートのステッチカラーを明るいブラウンとして上質さとともにSUVの力強さを強調した。ファブリック内装はブラックを基調に，新しい布地の立体感で空間に豊かな表情を演出した（Fig. 16，17）。

Fig. 16　Pure White Interior

Fig. 17　Black Interior

6. おわりに

今回の新型CX-5のデザイン開発では，魂動デザインの深化を図るため，マツダ独自の表現手法を探求した。その結果としてトレンドとは一線を画す，人の手のぬくもりが感じられる造形や日本の美意識という価値観を取り入れた新しい表現を行った。これらマツダデザインのこだわりに共感していただき，単なる移動手段という存在を越えて，新型CX-5と過ごす日々の暮らしをより一段豊かなものに感じていただけると幸いである。

マツダの目指す「Car As Art」の究極の姿の実現へはまだまだ道半ばである。クルマとしての美しさの探求を愚直に突き詰め，更なる深化を続けていきたい。

■著　者■

諫山 慎一